

前回の分科会での主な委員ご意見

項目	ご意見
孤独・孤立に関する市民アンケートのクロス集計結果	●クロス集計によって見えた傾向を踏まえて、例えば 40 代や、30 代で親と同居している層などに対して、具体的にどのような支援を講じていくのかが重要ではないか ●「つながる」をキーワードとして議論していくにあたり、人や場所だけではなく、デジタルの考え方も考慮する必要があると感じた
現計画の振り返り・グループインタビュー	●前例踏襲をやめるなど根本的に考え方を転換するという視点を持ってもよいのではないか。限られた資源の中で、すべてを実施するのではなく、次期計画に向けてトライアーズが必要ではないか ●集約化も必要で要配慮者支援を例にとれば、「平時から支援が必要な人」が災害時においても配慮が必要であるのだから、共通でくくれるところをくくることも必要 ●マイノリティに関する視点がキーワードに含まれていないのではないか ●福祉の観点に緊急時の医療におけるトライアーズのような考え方を当てはめるのは、そぐわないというか、抵抗感がある。また、抜本的な課題解決の議論は重要であるものの、それは福祉というより政治の領域の話として聞こえた
次期計画の方向性	●人口減少社会を前提とした検討が必要である ●平時の福祉の中で、災害に対してどう備えるのかという視点は一つの柱になる ●外国人支援、ステップファミリー、単身中年層の孤立、非正規・ギグワーカー(短時間労働者)や、デジタル化の進展に伴う AI をうまく活用できる人とそうでない人の情報格差への対応も重要な課題である ●居住支援は、重要性が増しており、孤独死や身寄りのない人への対応が必要 ●今後の多様化する課題にマンパワー不足の中でも対応するため、施策の横断化や複合的な対応、AI の活用等も含めて検討していく必要がある ●防災や住宅など、各分野との関係性も踏まえた整理が必要ではないか ●多分野協働プラットフォームや地域づくりコーディネートの部分が今後の重要なポイントになるのではないか ●趣味や得意なことを通じて地域の中につながりが広がっていくきっかけがあるのではないか。そうしたところに、専門職が溶け込みながら地域の方々との接点を広げていくことも有効ではないか ●個人の活動を地域の実践につなげる仕組みや、社会との接点づくりを意識した取組を進めることで、担い手不足への対応にもつながるのではないか ●市民一人ひとりが主体となってつくっていくという意識をどう醸成するかが重要だと感じており、「自分のまちは自分たちがつくる」という意識や、仙台への愛着を育てていく視点を、計画の中に盛り込めると良いのでは

	●住宅確保とともに就労の確保が大きな課題となっており、協力雇用主の拡大がなかなか進んでいない現状に課題を感じている。就労の問題は、「働きたい人」と「受け入れる側」をつなぐ仕組みづくりが重要だと考えている ●「仙台大好き」といった感覚のような、市民の愛着をどう育てていくかという視点は重要ではないか ●若者がこのまちに関わり続けたいと思えるような仕掛けづくりが重要ではないか ●市民や地域を巻き込みながらどのように進めていくのかが見えにくい ●地域福祉計画としては、仙台市の特性や「仙台らしさ」をしっかりと踏まえることが重要ではないかと考える。仙台市は学生が多く、また近隣市町村から通勤する人も多いなど、人の流動性が高い地域であるという特徴がある。そのため、住所のみで地域を捉える従来の考え方には限界がでてくるのではと感じている。市内で活動する学生や社会人なども含めて考える視点が必要ではないか ●市への愛着を醸成する観点からは、「自分らしく安心して暮らせる」という基本目標の表現について、住所を持たない人たちが外れてしまう可能性があると感じている。今後5年、10年先を見据えた場合、現在の表現はややもったいないのではないか
--	--